

## 第1部 中国思想と混合民族

### 第1章 中国思想の核心

#### 1, 長い歴史の国家

中国は独特な思想を創造し、それを3000年近くも継承し続けた世界で最も輝かしい歴史の国である。BC8世紀頃、封建制度の周が崩壊して、春秋戦国時代に移行すると、孔子、孟子をはじめとして現在まで名が残る多数の論客が「百家争鳴」を展開して、多様な思想が創造された。

BC3世紀に、郡県制の官僚国家である秦が形成され、漢字、度量衡、車輪の幅、論理構成が統一されたと言われている。

それ以来、王朝が何回も変わり、小国が争う長い内戦や異民族支配の時代がしばしば訪れた。普通の国では、王朝が変わったり、異民族に支配されるたびに、文化や風習が変わるものであるが、新しい国が現れた後、中国ではどんな王朝が変わろうが、どんな異民族に支配されようが、中国文化の基盤は動かず、中国は異民族文化を吸収し、多民族を包含するますます大型の中央集権国家に成長した。中国は、漢の終わり頃から、漢族の国になった。

唐の時代まで、中国の領域は、中国文化が影響を与える地の果てまで続き、国境は存在しなかった。国家意識が生まれた宋の時代には、中国の面積は秦の5倍に増え、清の時代にはさらに宋の2倍に膨張し、現在に至っている。中国は形式的には近代社会であるが、依然として、漢族が住む中心部を核として新疆・ウイグル等の文化的に遅れた周辺が同心円状に広がる「多重文明の総合的結合」という性格を維持している。

中国文明は、東が大海、西が高原と砂漠、北は氷雪の大地、南は氷河の高山と熱帯林囲まれた広大な空間の中にある。漢族が人口の90%を、55の少数民族が残りを占めている。漢族は、北方や西方に出現した約90の民族の血が混り合った集合体だと言われている。人口は、17世紀には1億人だったが、現在は13億人に達している。

中国は11カ国と国境を接し、国境の90%は、新疆、ウイグル等の周辺の少数民族自治区である。その外側にある東南アジアの国には、2500万人の華僑が住み、それらの国の経済を支配している。フィリピン、シンガポールの首相は漢民族である。アメリカとカナダにそれぞれ340万人、140万人が生活し、中国のアメリカ大使は中国系アメリカ人である。最近、ヨーロッパやアフリカでも華僑が増えている。

中心部の漢族は、周囲を少数民族に囲まれ、その外側の地域の国は、華僑によって経済的に支配され、中国は世界的規模で膨張している国家と言えよう。

#### 2, 政治哲学の儒教

古代から、中国では儒教、道教、仏教という3つの宗教が栄え、国を支え続けた。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教が発生した砂漠地帯では、人生は苦境の連続であったから、人々は唯一の神にすがり、神の国での再生を願って生きてきた。

インドでは高温・多湿の地が多く、生きることが苦痛だった。ヒンズー教を信じ、この世は輪廻転生の一瞬の宿と諦観し、多数の神と語らい、苦悩からの解脱に努めた。

これに対して、中国では、黄河から長江の南にかけて、温暖な気候の大地が広がり、河川を管理すれば、人生を楽しむ余裕が生まれた。孔子は、人生を楽しく生きる方法を繰り返し述べた。「友達が遠方から訪ねてくる」のも、「学んで時々復習する」のも「楽しからずや」である。

紀元前の中国人は、丸い地球を知らなかった。天下は中国の天子の住む場所を中心としており、そこを天元（碁盤の天元と同じ）として、天下は同心円を描いて無限に広がり、中心から離れれば離れるほど、文化水準が低く、野蛮人の国になるという中華の世界観が築かれた。この世界観が3000年にわたって中国人にしみ込み、文化的集積になり、中国という国家を永続させた。キリスト教文明とは全く異なる文明体系が、キリスト教より遙か古い時代から続いている。

中国人にとっての悩みは、死によって楽しい現世を去ることである。春秋戦国時代の諸子百家の思想家は、この難問に挑戦した。儒教は、つぎのような理論を創った。人間は魂（精神）と魄（肉体）から成り立っており、両者が一体の時に生き、分離する時に死ぬ。子孫は両親や祖先を敬い、祖先の魂と魄が一体となって現世に戻れるように毎年、招魂の儀式を行う。また、自らは子供を産み、その子孫が同じ儀式を永遠に繰り返すのである。

加地伸行氏（「儒教とは何か」中公新書）によると、中国では、「自分の生命は何万年も遡って存在し、今後も永久に祖先と子孫の中に生きている」と信じられている。周王の時代まで（BC8世紀頃）、諸侯は血縁的な制度や祖先祭祀によって結合していたが、春秋戦国時代以後、人口移動が激しくなり、血縁集団は地縁集団へと拡大し、皇帝がその集団の家父長群を直接支配する国になった。

儒教の経典である「大学」では、祖先と子孫の縦の一体感を横に広げるべきであり、「身を修め、家を整え、国を治め、天下を平らかにすること」の重要性を強調している。天下を平らかにすることは、天下を統一することである。

儒教で最も重要な徳目は孝であり、徳目は礼という形式によって表現された。人生には、結婚式、成人式など社会関係を確かにする様々な行事がある。飛び抜けて重要なのは親の葬礼であり、喪服や喪の行事について細かい規則があり、喪に服す期間も決められていた。

これに次ぐ徳目は仁（愛）であり、父母を最優先し、血縁・地縁族関係が薄くなるにつれて愛情は遠のき失われ、地縁共同体の団結が守られた。キリスト教のように、愛は全ての人に対して平等ではない。

統治者は、「修己治人」の生活を送り、「詩書礼楽」を習得する必要がある。つまり、詩

と書を学び、礼・楽の意義を知り、歴史、文学、人生等の知識を民衆に普及し、皇帝を尊敬する従順な民を創るのである。

君主が礼に従って民を治めれば、民は真心をもって応ずるはずだ。礼を知らない君主には、民は逃散をもって応えるだろう。官僚は「礼」を守り、「楽」を極めて民衆の教養を高め、秩序ある統治を支えるのである。

孟子は「天下の本は国にあり、国の本は家にあり、家の本は身にあり」と述べ、皇帝を頂点とし、家庭・家族を底辺とした壮大な儒教の価値体系に統一された時、徳の世界が出現すると考えた。

### 3, 実存哲学の老荘道教

儒教と同時に生まれたのが、老子や荘子が代表とする道家の思想である（老子は実在の人物ではないという説がある）。老子は「有と無は同時に生まれ、難と易は互いに補い合い、長と短はそれぞれ役割があり、」「仕事は達成されても誰もそれを知らない。また、名声を求めない。その時成功が生まれる」と主張した。「足るを知る」、「止まるを知る」は、誰でも知っている老子の名言である。

ヘーゲルは、19世紀に、弁証法哲学を創造した。それによると、歴史は「矛盾」によって、低次元の段階から高次元の段階へ自己発展する力が生まれ、その集大成として、全てのものを包含する絶対精神（神）が実現されるという。これに対して、老子の弁証法では、「矛盾」は静かに存在し動かない。

矛盾は、対として存在し、自己同一性を備えている。醜や悪が存在して、初めて美や善の存在が明らかになり、生きる目的がはっきりする。（帳鐘元「老子の思想」講談社学術文庫）。

老子は「普通の学問を修めると、知識は増えていくが、「道」を修めれば、知識がどんどん減り、無為に行き着き、恍惚とした「道」（タオ）の状態になる。その時、万事が立派に成し遂げられる」と述べ、満ち足りて生きる法を発見できるという。19世紀になって、ハイデッカーは、「形而上学は全てを忘却することである。全ての思惟を捨てた時、新しい覚醒が生まれる」と老子と同じことを述べている。

鄧小平の晩年は「道」の状態だったと思う。

彼は経済の市場経済化に成功し、党内闘争の結果、彼の思想と政策を完全に理解する人ばかりを幹部に任命し、彼は何も言わなくても、中国経済は彼の思うように動いた。そういう状態になると、彼は存在する必要がない。最晩年は忘れられる存在になった。

荘子は、自己同一性を自然界に広げ、人間は自然の中に生きていと主張し、人間の生死や四季を気の流れと考えた。岸本美緒・宮嶋博史両氏によると（「明・清と李朝の時代」中公文庫）、宗族（同じ祖先から分かれた男系血縁集団）のまとまりの基盤には、男系の血筋に脈々と流れる生命感があるという。その流れは「気」であって、1つの水源から多く

の支流が分かれるように、それは、父から子、孫へと枝分かれして拡大していく。

個人の生命は「気」が流れる器であって、祖先から子孫へ流れる永遠の生命の一部に過ぎない。中国の宗族意識は自分の生命そのものとして存在し、会ったことがない人でも、気が同じであれば、自分自身の延長になる。気は万物にも通じ、宇宙には気が充満している。人と万物が一体になった時、共同体意識に基づき、中国を中心とした人間社会・自然界の世界秩序が完成するのである。

ところで、道教は、20世紀に入る頃には、古い土着の神仙道と結合し、この世で自然と一体になって生き続けるため、不老不死の薬を求め、道教は健康を求める薬学に変わった。

儒教は統治者のための哲学であり、純粋な道教は統治に関心を持たず、社会や大自然に生きる哲学であり、政治的敗者や庶民が静かに生きるための人生論にもなる。

#### 4, 庶民的な大乘仏教

仏教は輸入宗教である。BC 5世紀ごろ、釈迦が開祖した仏教では仏が国家の最高の真理と権威を備え、かつ皇帝や祖先より上位に位置している。当然、天下の中心はインドになる。また、僧は財産も家族も仕事もすっかり捨てて出家し、サンガという組織に入り、瞑想を続けて自分を見つめ、自力で悟りへの道を発見するのである。

しかし、どれだけ深く悟っても釈迦にはなれない。釈迦は、数十億年に1人しか現れないからだ。僧は自分の解脱のために努力し、在家信者は出家した僧に奉仕して功德を積むのである。小乗仏教は、戒律が厳しいので、スリランカ、ミャンマー、タイなどの東南アジアの狭い地域に普及しただけだった。

BC 1世紀頃、やはり、インドで在家のままで悟れる便利な大乘仏教が生まれた。大乘仏教では、宇宙には星のように多数の世界が存在し、それぞれに仏がおられる。仏(如来)は、釈迦、阿弥陀、薬師、大日など、それに次ぐ菩薩には、観音、文殊など沢山おられる。

仏に会う方法も簡単になった。浄土信仰では極楽という別世界が存在し、そこでは、阿弥陀如来が何時も待っておられる。人は往生すると、極楽に着き、すぐ阿弥陀如来に会えるのである。

般若経系統の仏教では、般若心経を聞いて感動した人は、前世で仏に会った証拠であるから、お経を唱え、精進すれば、涅槃で成仏できるという。大乘仏教は庶民向きであり、現実的な中国人にふさわしい宗教だった。

釈迦の仏教では、輪廻転生の世界から解脱するために苦行を続けると、その功德が他人の転生にも及ぶと考えた。これに対して、大乘仏教では、人間は、この世で善行を積み、誰でも死とともに、蓄積されたエネルギーが一举に爆発して輪廻転生の因縁を超越して、涅槃の世界に一足飛びで到達できる。解脱した後は、辛いこの世に戻らないという新理論である(佐々木閑氏「般若心経」NHK出版)。

釈迦は、この世の物を感覚の束に過ぎず、実体がない「空」として捉えた。その「空」が、人間が関知しない仏のルールによって移り行くため、この世は「諸行無常」になるという。これに対して、大乘仏教は、世の中は仏のルールもない「一切が空」であるから、迷いから抜け出せない。仏は私達を迷いから救うために別世界に涅槃を用意し、私達は、精進すればそこで成仏して、輪廻転生の世界を離脱し、永遠の休息が得られる。庶民は、修行・瞑想を続ければ、幸せになれる。

大乘仏教は中国から日本に輸入されて一層単純化され、浄土真宗のように念仏さえ唱えれば、悪人でも阿弥陀如来に導かれ、浄土で成仏できるようになった。

釈迦の仏教は、1世紀頃西域のガンダハラからシルクロードを通じて中国に伝わり、「華嚴経」、「法華経」、「涅槃経」など代表的な大乘仏經典が、南北朝、隋、唐の時代に中国全国に普及した。

小乗仏教は、家族中心の血縁社会の中国では無理だった。中国人は、インド人のように壮大な哲理を画き、楽しむ気風がない。大乘仏教を信じて、論理的に「空」を追求するより、心が安まる禅宗や密教が盛んであった。

## 5, 皇帝と「三教合一」

春秋戦国時代から500年後の漢の時代に、儒教や道教が体系化され、論語や老子は書物にまとめられ、国家の思想体系が完成した。また膨大な仏教典がインドから輸入・翻訳され、莫高窟や巨大な仏像が建設された。法家思想が発展し、また壮大なスケールの兵法もでき上がった。

法家思想の代表である韓非子は、儒教の徳治主義に対して法治主義を主張し、秦・漢時代には見せしめ刑罰を軸にした全55巻の法律体系が完成した。

また、秦・漢時代に、全13編からなる兵書「孫子」が編集され、戦争論は戦争哲学の域にまで高められた。戦争は国家の存立がかかる一大事であるから、準備・計画が重要であり、長期戦は、補給によって国力が消耗するから、絶対に避けるべきだという。

戦争は、敵を無傷のままにして勝利を収めることが最も望ましい。戦後、そのままの状態では経済活動が可能になるから、成果が大きくなる。敵を徹頭徹尾に破壊することは、最低な戦術である。まず、戦わずに勝てという。そのためには、スパイを放って、当方の戦力が強いと錯覚させたり、相手を同盟国と不和にさせたりする。騙すことがポイントであるという。

秦・漢の時代には、「儒教は世を治め、仏教は心を治め、道教は身を治める」という3つの宗教が相補うという「三教合一」の思想が広がった。それによると、如何なる宗教も、お互いに他の宗教を超越した絶対的存在になり得ない。皇帝の権威を超越した宗教は存在せず、いずれの宗教も皇帝の配下に置かれた。キリスト教世界にくらべると、宗教の権威が相当低いので、宗教間の争いがなく、「三教合一」が揃って成り立った。その上、現在で

も通用する兵法論まで生まれた。それによって、漢族中心の天下が堅固になり、周辺民族を囲い込む巨大な帝国が生まれた。

漢は、強力な北方民族の匈奴によって存立を脅かされたが、BC 2世紀の武帝の時には、儒教思想に基づいて官僚機構が形成され、郡県制がしっかり整備された。農地は測量後に登録され、国家は農民に田租や人頭税を課し、社会主義のような中央集権の統治システムが形成された。

中国政治は天下と冊封体制から成り立っていた。天下の中心地には天子が住む。その周辺の文化が遅れた国には、それぞれの序列に応じて天子との君臣関係を結び、毎年、朝貢物と天子の徳を称えた文書を献納し、天子は高価な返品で応えた。

漢は、西域の国々とも冊封関係を結び、シルクロードを繋ぐ国々との交流を促進した。日本は、冊封関係には入らなかったが、漢から金印を送られ、国家と認められた。

中国では、2000年前に天子が徳によって天下を統治し、民がそれに従うべきだという壮大な「三教」の理論体系が完成し、また優れた刑法や兵法理論が生まれ、その理論は余りにも優れ、国内だけではなく周辺国にも広がった。私達の時代には、旧制中学、旧制高校で儒教と道教をたっぷり学び、「漢文」は入学試験の重要科目だった。韓国は、かつて（中国が清の時代）、儒教の本家であったことを現在でも誇っている。「三教」思想の体系が、その後、2000年にわたる中国の歴史の方向を決めたと言えよう。